第3章　カッコの用法

第1節　人・作品による——カッコの用例——

カッコ，つまり，パーレンは，（　）の形の符号である。その用例を集めて，カッコの用法の類型を求め，そこからいろいろな問題をくみ取ってみようとした。本章は，先に，『立教大学日本文学』の創刊号（昭和三十三年）に「カッコの用法」と題して掲載した論文のうちから，二つの節を取り上げ，補訂を加えたものである。符号の使われ方調査の具体的な一例としてここに再録することとした。

1

芥川竜之介の『河童』には，次のような部分がある。

○僕は勿論妙に思ひましたから，「Quax, Bag, quo quel quan?」と言ひました。これは日本語に翻訳すれば，「おい，バッグ，どうしたんだ」と云ふことです。㈡——a（注7）

ここにはカッコははいっていないが，次の部分になるとはいってくる。

○僕は勿論 qua（これは河童の使ふ言葉では「然り」と云ふ意味を現すのです。）と答へました。㈤——b（注8）

○マッグは生憎(あいにく)脳天に空(かん)罐が落ちたものですから，quack（こ

れは唯間投詞(かんとうし)です）と一声叫んだぎり，とうとう気を失つてしまひました。(七)——c（注9）

ところが，その後には，また，次のような部分が出てくる。

○ゲエルはふだんよりも得意さうに顔中に微笑を漲(みなぎ)らせたまま，丁度その頃(ころ)天下を取つてゐたQuorax党内閣のことなどを話しました。クオラツクスと云ふ言葉は唯(ただ)意味のない間投詞ですから，「おや」とでも訳す外はありません。(九)——d（注10）

○ロツペはクオラツクス党を支配してゐる，その又ロッペを支配してゐるものはPou-Fou新聞の（この『プウ・フウ』と云ふ言葉もやはり意味のない間投詞です。若(も)し強(し)ひて訳すれば，「ああ」とでも云ふ外はありません。）社長のクイクイです。(九)——e（注11）

いま，この五つの例を考えてみると，b・c・eにはカッコでカッパ語の訳や説明がつけてあるのに対して，a・dにはカッコが用いられていない。実は，aの前にも「Quax, quax」というのが出てくるが，そこにはa以下に見られるような説明がついていないから，説明としてはaが最初になる。そのために，最初のaにおいてはカッコを用いず，そのあとは軽く扱うつもりでカッコの中に説明をつけたと考えることもできるかと思うが，dによって，その考え方はぐあいが悪くなる。執筆の事情が細かくわかれば，その点の解決がつくかもしれないが，いまのところ，これは保留しておく。なお，この変化を説明の長さによる区別と考えることもできないことは，dとeとによって明らかであろう。芥

川が，文体に関して，いろいろなくふうをしていたところから，説明のつけ方にも単調を避けて，カッコをつけたり，つけなかったりしたのかもしれない。

説明をするのに，カッコをつけたり，つけなかったりするものとして，もう一つ，山本有三の『路傍の石』から引いてみよう。

○　おばあさんは白い歯を少し見せて，寂しく笑つた。この女は，仲まうちでは「おともらいのおきよ」でとおつている，おともらいかせぎの老婆だつた。

おともらいかせぎというのは，会葬者のふうをして，葬式のあとについて行き，帰りに，引きものの菓子おりをもらつてくる商売である。うまく行くと，一日に三つも四つも葬式に出つくわすので，（彼らのあいだでは，そういう日を「お正月」とか，「満員」などと呼んでいる。）女の商売としてはなかなか割りのいい仕事なのである。―中略―

しかし，年よりの女がやるには，実際割りのいい仕事にはちがいないが，ただ一つ，めんどうなことがあつた。それはお客さんを探すことである。

彼らのあいだでお客さんというのは，葬式のことである。（かんなん，なんじを玉にす　二）――f（注12）

ここでは，「おともらいかせぎ」と「お客さん」とは，それぞれ次の段落で説明してあるが，「お正月・満員」は，カッコの中にはいっている。「彼らのあいだで……」という説明のしかたは，「そういう日」についても，「お客さん」についても，ほとんど同

じである。それにもかかわらず，一方にはカッコをつけ，他方にはつけないという差があるのは，なぜだろうか。

前者は「……と呼んでいる」，後者は「……のことである」という違いもあるが，もう一つ注意しておきたいことがある。「おともらいかせぎ」や「お客さん」ということばは，この後にも何回か出てくるが，「お正月」や「満員」は，ざっと見たところ，どうも出てこないようである。つまり，「お正月・満員」の名称は，この小説の運びの上では，わきにそれた，いわば軽いものだと思われる。それでカッコの中に入れて書いたのだろうと想像することができるのである。

さて，上に見られるようなカッコの使い方は，かなり一般的であって，多くの例を拾うことができる。その例を見てゆくと，いくつかの型のようなものがあることがわかるのである。以下に，それを述べてみよう。

2

谷崎潤一郎の『卍』には，次のような部分がある。

○もう先生にはお分りになつてをられますやろが，その，わたしが無意識のうちにモデルにしてた人云ふのんが，——どうせ新聞にも出ましたのんですから，云うてしまひますが，——徳光光子（とくみつみつこ）さんやのんです。（作者註，柿内未亡人はその異常なる経験の後にも割に窶（やつ）れた痕（あと）がなく，服装も態度も一年前と同様に派手できらびやかに，未亡人と云ふよりは令嬢の如くに見へる典型的な関西式の若奥様である。彼女は決し

て美女ではないが，「徳光光子」の名を云ふ時，その顔は不思議に照り輝やいた）けど私は，まだその時分には光子さんとお友達になつてた訳ではあれしません。（その一）—g（注13）

ここの「作者註」としてカッコの中に述べてゆくのが，一つの型と言えるだろうと思う。『卍』には，このようなやり方が，ほかにも見られる。なお，はっきり「註」とことわらなくても，次のようなものは，これに近い。

○そのとき遠くの女中の声がして，

「かの子さーん」

と呼ぶのが聞えた。それはわたくしと同名の呼名である。わたくしと逸作は，眼を円くして見合ひ，含み笑ひを唇できつと引き結んだ。

もう一度，

「かの子さーん」と聞えた。すると，襖の外の廊下で案外近く，わざとあどけなく気取らせた小娘の声で，

「はーい。ただ今」

そして，これは本当のあどけない足取りでばたばたと駆けて行くのが聞えた。

「お雛妓（しやく）だ」

「さうねえ」

（筆者はこゝで，ちよつとお断りして置かねばならない事柄がある。こゝに現れ出たこの物語の主人公雛妓（すうぎ）かの子は，この物語の副主人公わたくしといふ人物とも，また，物語を書

く筆者とも同名である。このことは作品に於ける芸術上の議論に疑惑を惹き起し易い。また，なにか為にするところがあるやうにも取られ易い。これを思ふと筆はちよつと臆する。それで筆者は幾度か考へ直すに努めて見たものの，これを更へてしまつては，全然この物語を書く情熱を失つてしまふのである。そこでいつもながらの捨身の勇気を奮ひ気の弱い筆を叱つて進めることにした。よしやわざくれ，作品のモチーフとなる切情に殉ぜんかなと）（岡本かの子『雛妓』）――h（注14）

○漸くに綴り成したる露団々（つゆだんだん）は売れたり，書肆への談判一切を委ね頼み置きたる李山張水（仮設の名なり）二人の友は幾十枚の紙幣（さつ）を手にして我が許に来れり。（幸田露伴『酔興記』）――i（注15）

○「義雄の追求の仕方があまり苛（きび）しかつたんだらうツて，俺は台湾の方に居てお秋（嫂（あね）の名）と二人でその噂（うわさ）をして居たよ――」（島崎藤村『新生』後篇百三十五）――j（注16）

○また別な話でありますが，ここに同席なさるこのかた（私のこと）に一言申し述べます。（井伏鱒二『炭鉱地帯病院』――その訪問記）――k（注17）

○『極楽はありとは言へど片だより，釈迦（しやか）も弥勒（みろく）もいまに行きよる。』（いまだに行きつつある途中だ，との意）昔からさういふ歌があるさうにござりますが，私もその通りぢやと思うてをります。（宇野千代『人形師天狗屋久吉』(8)）――l（注18）

3

次に，前に出た語句の説明を補充的にカッコに入れてあるものも，一つの型といえそうである。

夏目漱石の『私の個人主義』には，次のような部分がある。

○貴方がたは是からみんな学校を去つて，世の中へ御出掛になる。それはまだ大分時間のかゝる方も御座いませうし，又は追付け実社会に活動なさる方もあるでせうが，いづれも私の一度経過した煩悶（たとひ種類は違つても）を繰返しがちなものぢやなからうかと推察されるのです。—中略—

もし貴方がたのうちで既に自力で切り開いた道を持つてゐる方は例外であり，又他の後に従つて，それで満足して，在来の古い道を進んで行く人も悪いとは決して申しませんが，（自己に安心と自信がしつかり附随してゐるならば，）然しもし左右でないとしたならば，何うしても，一つ自分の鶴嘴で掘り当てる所迄進んで行かなくつては行けないでせう。——m（注19）

これは学習院輔仁会での講演である。したがって，普通の小説とは区別しなければならない点があるかもしれない。

これと似た例は，他の作家の小説にも見られる。

○私はどことも知らないところへの郷愁（それは心と体との）から，もの毎にいらいらする心持を起すやうな心身の状態になつて居た。（佐藤春夫『お絹とその兄弟』）——n（注20）

○三蔵ははつとしてどぎまぎしてゐると小光の方は無造作に

「御免下さい。」と大きな声で挨拶(あいさつ)して（それも鏡の方を向いたまゝで）薬指で薄く紅粉(べに)をつける，眉をつくる。（高浜虚子『俳諧師』七十六）――o（注21）

○蒲団を片寄せて，きちんと坐(すわ)つて，胴ぶるひを食ひとめる為めに，しつかりと腕組をした村上先生は，部屋の隅に落着なく尻を据ゑて，眼尻と鼻梁(はなばしら)とに皺(しわ)をよせてにやにやと人の好ささうな微笑（熊吉にそつくりの）を漂はす相手を見ると，一寸，あてがはづれたやうな気がした。（加藤武雄『嗚咽(をえつ)』）――p（注22）

上のm・n・o・pの例では，カッコの部分をほとんどそのまま前の方に移すことによって，文脈を整えることもできる。

もっとも，そのような位置の転換だけでは前後の続きぐあいを整えることのできないものも多い。

島崎藤村の『破戒』には，次のような所がある。

○昨日校長が―中略―寧ろ今度の改革は（校長はわざわざ改革といふ言葉を用ゐた）学校の将来に取つて非常な好都合であると言つたこと――そんなこんなは銀之助の知らない出来事であつた。（第弐拾参章㈣）――q（注23）

これは，その一例であるが，前のb・c・e・fなども同様の性格を持っている。

これまで見てきた例文では，カッコの符号を無視して，つまりカッコの符号だけを除いたと仮定して，前から読んで行くと，文脈がうまく続かなくなる点では共通している。これに対して，う

まく続く例も少なくない。

永井荷風の『あめりか物語』に，次のような部分がある。

○朝(あした)に聖書を展(ひろ)げた手で，夕(ひそか)竊に酒杯(しゆはい)を挙げたい位なら，（例へ禁欲し得られるにもせよ）寧ろ進んで酒杯(さかづき)のみを手にするが好い。（岡の上　四）――r（注24）

前の諸例が注あるいは説明の性格をかなり色濃く持っており，カッコの前に置かれた語句にかかるともいうべきものであったのに対し，この例が，むしろ後の語句にかかり，それを修飾するような性格を持っていることに注目すべきであろう。

○壱円二十銭の雪駄を買つて得意な細君，（みすぼらしい姿(なり)をして格別不平もいはぬ細君，）毎日 佐野の下に使はれて口を糊(こ)するだけの収入も無い境遇，此頃(このころ)は小説は固(もと)より俳句すら作る勇気のない堕落，肺病，貧，闇といふやうな感じが全身を襲ふ。（高浜虚子『俳諧師』五十三）――s（注25）

ここでカッコを使ったのは，恐らく文体に関する配慮があったのではないかと思う。「細君」「境遇」「堕落」の三つが，「肺病」以下の三つに対しているが，ここでカッコを使わないと，「細君」が二つ重なるからではなかろうか。

○私が愈立(いよいよ)たうといふ間際になつて（たしか二日前の夕方の事であつたと思ふが，）父は又突然引つ繰返つた。（夏目漱石『こゝろ』中　両親と私九）――t（注25）

以上のr・s・tは，ほぼ同じような例である。

なお，カッコの前で文が切れている場合には，文脈の続きぐあ

いの点では，ほとんど問題にならない。次のような例で明らかであろう。

○彼は，娘から母親に，視線を移した。（この時，会堂の中には，彼等きりしかゐなかつた。）二間ばかり離れたベンチに坐つた母親は，満足さうに，こちらを向いて笑つてゐた。（田中純『妻』）——u（注27）

4

さて，いままでに述べたものは，カッコに囲まれた部分を除いても，いちおうは文意の通ずるものであった。しかし，そのように除いてしまってはぐあいの悪いものもあるのである。

○（こいつはいい鳥がひつかかつたぞ）と，忠さんは心の内で思つた，彼はてつきり喜一が百五十円に，ひよつとすると三百円位に売れるに違ひないと思込んだ，—下略—（金子洋文『犬喧嘩』三）——v（注28）

○まるで（色づけられた気体）と云つたやうに……あたり一面に低く白い雲が下りて来る。（相馬泰三『田舎医師の子』八）——w（注29）

○雨戸のやうな歪（ゆが）んだ扉を開（あ）けると，ワアンと子供達の息が私にかゝつた。（女子六年　イ組）と，黒板の上に札が下つてゐた。（林芙美子『風琴と魚の町』8）——x（注30）

○石生と書いて，（いさふ）と読ましてあるのも，むずかしい。（島崎藤村『山陰土産』一，大阪より城崎へ）——y（注31）

○「あゝ牧夫さん？」と母は自分を顧みて，「つい昨夜の事だ

よ。」とと始めてしみじみと，「（武さんはまだ帰りませんか）ツて来てね，（まだで御座んすよ）と云ふと，（僕は明朝谷村へ帰りますが，武さんが戻つたら宜しく云つて下さい）と斯う云ふのさ。」（中村星湖『少年行』十二）――z（注32）

上のvからzまでは，カッコの後に「思った」とか「読まして」などと，カッコ内の部分の内容や性格などを説明してある点が共通している。その説明が前に来るものや，省略してあるものも無いことはないが，多くのものに説明がついていることに注意しておく必要がある。

5

以上，おもに小説の表現に材料を求めて，カッコの使われ方の諸相を見てきた。これらから，次のようなことがわかるであろう。

まず，カッコの使われ方は，一つの作品においても，必ずしも統一的ではない場合がある。中には，その表現内容が小説の中で占める重要さなどによって変わるかと思われるものもある。

第二に，カッコの使用例を見ると，作者が注釈的説明を加えるという部類のものと，引用符号的に用いられたものとがある。注釈的説明の部類の方では，作者が姿を現わすものとそうでないものとがある。また，注釈的説明というよりは，補充的表現（注）というべきもの，挿入的表現（注）というべきものなどもある。

第三に，カッコに囲まれた部分が，文の形をとるものもあるし，語句に過ぎない場合もある。

第四に，文脈の連続性に関しては，カッコに囲まれた部分を除

外すると文脈が続くものがある。これは，注釈的説明の部類のもののうちに見られることがある。なお，カッコに囲まれた部分を除外せず，前から読んでいって，文脈が続くのは，カッコが引用符号的に用いられた場合である。注釈的説明の部類のものでも，挿入的表現というべきものでは，文脈が切断されないことがある。

（注）「補充的表現」と名づけたのは，文例m・n・o・pなどに示されるものである。文脈上，逆行的といえる。

「挿入的表現」と名づけたのは，文例r・s・t・uなどに示されるものである。文脈上，順行的といえる。

以上の名称は，仮に名づけたものであるから，名称自体には，こだわらない。どういうものを示すかが理解されればじゅうぶんである。ここでは，ごく大づかみに考えているのである。

第2節　内と外と——カッコの問題——

前節で述べたことが，カッコの用法のうちの一部分に過ぎないことはいうまでもないが，カッコの用法として一般的にいわれている数か条に含まれていないものも，いくつかあった。このことはとくに注意すべきであろう。一般的規定と現実の用例とが常に一致するとは限らないといってしまえばそれまでであるが，カッコの用法一つを取って見ても，まだまだ，各人のくふうが生かさ

れる面もありうるということになる。一方から見れば，まだ，それを使う習慣が固定していないということにもなるであろう。あるいは，一般的規定の方を，もう少し検討してみることが必要になるかもしれないのである。

もっとも，zの例は，明治40年の作である。これなどは，現代ならばフタエカギを使うのが普通である。このような，やや特殊なものも含まれているから，すべてを対等の重さで考えてはよくないこともたしかである。

さて，前節では小説を中心にして，手当たりしだいに順序もなく，いくつかの例を拾ったのであるが，その中にあったものでも省略した場合があった。また，他のジャンルに，これらとは違った用法が見られる場合もある。さらに，その用法ばかりでなく，カッコに関連して考えるべき問題もある。そこで，以下，それらについて簡単に述べてみよう。

1

斎藤茂吉の『滞欧随筆』の「ドナウ源流行」には，

○Münster（伽藍）の前に行くと悲しい歌のこゑが聞えてゐるが戸を閉してある。㈥（注33）

○僕は『ドナウ源泉』（Donauquelle）を見に行つた　㈦（注34）

とあり，同じく，『お通夜』には，

○カラカエといふのはカラカハ（辛皮）の訛で，太い山椒（サンセウ）の皮を剝いで，それを食ふのである。（注35）

とある。前者が外国語とその訳とであり，後者が漢字とかたかな

とであることはいうまでもないが，カッコに入れる部分が，それぞれ入れ替っていることに注意したい。どちらをカッコに入れるかは，その場合の筆者の考え方によって定まってくるのであって，おもなもの，つまり直接に表現の前面に押し出されるもの，が表に出され，二次的なもの，つまり表現意識からすると一歩立ち止まってから書かれるもの，がカッコの中に囲まれるという例になると思われる。

2

なお，漢字とかなとについては，ルビに代わるものとしての用法があり，また，当用漢字制定後は，いわゆる交ぜ書きの問題にからんで，その用法が拡張された。

ふりがなの廃止を主張し，かつ，それも実践した山本有三の作品に，次のようなものがある。

○ふり向くと，一つのえ顔に突きあたった。園田（ソノダ）だった。（『波』「妻一ノ一」）（注36）

この作品には，同様の例が，かなり多く，ふりがなの代用と考えることができるものである。

新聞紙上に交ぜ書きが現われたのは，当用漢字のわくを守ろうとした当初に非常に多く，最近では，新聞社の努力によって，かなり少なくなってきているようである。手当たりしだいに順序もなく拾ったものの例を次に示しておく。紙名，日付けなどは省略するが，昭和33年の夏ごろのものである。

○束（ツカ）や床板についた泥を……

○「鯖（サバ）ボイルド」と書いて……

○裏地にもみ（紅絹）のついている……

○防ちよう（諜）法の立案を検討して……

○さざれ石が大きなイワオ（巌）に……

○ケイ（螢）光染料をつかって……

○重大な危ぐ（惧）を抱かざるを得ない。

○弱い自ちょう（嘲）の笑みを残して……

○有名なけん（牽）牛，織女さえ……

○その経歴にキン（錦）上花を添える……

○「醴（れい）泉は美泉なり，……

例は多くないが，これらを見ただけでも，その組み合わせは，いろいろになっている。漢字とひらがな，漢字とかたかなの違いがあり，カッコの中にかなを入れるものも漢字を入れるものもある。カッコの中にかなを入れる方がふりがなに近いとすれば，漢字を入れる方は，いわゆるふり漢字に近いともいえるであろう。なお，ここに拾った例では，カッコが問題の字の直後に置かれているために，単語の内部にカッコが割り込んでいるような形になっているものもある。新聞における，この種の表現に関しては，まだまだ，いろいろの型があるが，ここでは深入りしないでおく。

3

さて，上の例でもわかるように，カッコを入れる場所は，かなり自由である。ルビのような性格を持つものは語中にはいる場合

もあるが，普通は文節の切れ目か，詞と辞との間にはいる。例を示すまでもないであろう。

○小さな壺が，置かれたやう（私の錯覚かしら）な気がする。（岡本かの子『鶴は病みき』）（注37）

○自然を写生（窪田氏等の用ゐる意味とちがふ）するのは，即ち自己の生を写すのである。（斎藤茂吉『短歌に於ける写生の説』）（注38）

カッコのはいる場合の普通の位置で，すべてを推すことには危険があるが，上の二つの例では，それぞれの筆者の語の認定が反映されているものと見ることができるかもしれない。特に，「写生」の方では，傍につけた丸の黒と白との使い方などにも注意する必要があると思う。

○さうして，その悪魔なるものは，天主教の伴天連か（恐らくは，フランシス上人）がはるばる日本へつれて来たのださうである。（芥川竜之介『煙草と悪魔』）（注39）

この例は，いちおう，カッコに囲まれた部分を除外しても文脈が続く部類にはいると認められるが，「伴天連かが」では少し無理のようである。カッコの位置をずらして，

……伴天連（か恐らくは，フランシス上人）が，はるばる…

のようにすれば，続きぐあいはよくなる。なお

……伴天連か（……）が，……

の形は，カッコが辞と辞との中間にはいってきて，普通の位置でもない。そこで，カッコの位置が適切でないと見ることもできるかと思うが，カッコが軽い意味でつけてあると考えることもでき

るであろう。そうすると，カッコの符号だけを除いても文脈が続く部類のものとなってくるはずであるが，そう考えてみても，ちょっとおちつきがよくないように思う。もっとも，

伴天連か（恐らく

伴天連（か恐らく

の両者を比べた場合に，後者のような形で文節が切られることに抵抗感があるという点を考え合わせなければならないであろう。いずれにしても，興味ある問題を含む使い方といえよう。

○警察から此処（ここ）まで来る（五六町の間）ちよ子が，疲れ切つてゐながらも，うはごとでも言ふやうに，のべつにしやべつたことを書く前に，―下略―（今野賢三『火事の夜まで』）（注40）

この例にも，似た点がある。「(五六町の)間」とすることもできるはずだが，そうしていないのが事実だし，また，そこに表現意識の中にひそむものをさぐり出す手がかりがつるめるかもしれないのである。

ちなみに，この「ちよ子」のしゃべったことが，カッコにはいっている。二千数百字に及ぶもので，カッコの中の長さとしては，長い方であろう。

4

次に，話しことばとの関連について考えてみよう。補充的表現にしても挿入的表現にしても，書きことばの場合にはカッコを使うことによって間に合わせることができるのであるが，話しことばの場合には，それとはいささか趣が違うのが普通である。

○万一怪我でもして片輪になつたら——お父さんなら，そんな事はないけれど——まあそんな目に逢つたら，一生楽に遊んで暮して行けるやうな手当が，お邸から出るんですとさ。

（長谷川如是閑『象やの粂さん』）（注41）

これなどは，その一例になるかと思うが，ダッシュで囲まれた挿入的表現があるために，その後に「まあそんな目に逢つたら」と，くり返しに近い表現がとられていることに注意する必要がある。

文例mで，漱石の講演を引いたが，この通りに話したかどうかは疑問である。その中に出てくる二組のカッコの中，後の方はこの通りに言ったかもしれないが，その時には，チェンジ・オブ・ペース（声の調子の変化）が現われたに相違ないと想像されるのである。

座談会の速記や，雑誌『言語生活』の「録音器」のように音声言語を忠実に文字化したものなどにも，カッコの現われる場合があるが，それは，速記者や解説者などがつけた説明であって，表現の主体が別であることに注意しなければならない。たとえば，「(笑)」などとあっても，話し手が「笑」と言ったのでないことはいうまでもない。

文例のｊやｋなども，表現の構造が二重になっていることに注意しなければならないであろう。つまり，作中人物の話と，作者の説明とであって，文章の中に作者や筆者が顔を出すという形になっているわけである。

5

カッコは，文章表現の補助符号である。したがって，上に述べたような文章だけに使われるのではなく，なお，いくつかのものに現われることは当然であろう。たとえば，戯曲などでも，人物の動作その他をカッコに入れて書くことがある。論文などにも現われることは，言うまでもない。また，現代の辞書の類には，非常に多く使われている。これは，その本来の性格から，説明をつけることが多いのであるが，スペースの節約などのために，いろいろな使い方がくふうされているのであろう。

ところで，短歌や俳句などでは，ほとんどカッコが使われないし，詩でも，訳詩を別にすれば，あまり多くないのではなかろうか。これらは，短かい形式のものであって，内容が圧縮されるとともに，文字の書き換えなどを除けば，カッコで注をつけるような性格のものではないことが，その理由になっているのだと思う。注のようなものは，その作品の前か後ろかに，別につけるのが普通なのである。

あとがき

符号は，文字を助けて，文字言語を成り立たせるのに役立っているものである。文字の字形や音訓などに一定の約束があるのと同じように，符号にも，それがなければ都合が悪いと考えられるであろう。しかし，その役目が補助的であるに過ぎないと見られていた時代には，どうしても大きな関心が払われなかったのも自然の勢いである。その中で句読法は，かなり以前から問題とされてきている。これは，表現の論理性に関係するところが大きかったからであろう。もう一つ，結局は同じことであるが，漢文訓読において，句読が切れなければ理解が困難であるという事情もあったと思われる。

符号は文字よりも図形的であると言えるであろう。つまり，目で見ただけである程度その機能が想像できるような性格のものが多い。この性格は，象形文字よりも，はっきりしているかもしれない。それに，符号は，一般的に言って，単純な形をしていることが多い。したがって，一見，似た形のものが区別して使われることにもなるのである。このような事情から，符号の形とその記される位置との問題が大きく浮かび上ってくるのである。

現代までに，多くの符号がくふうされ，使用されてきているが，漢文（訓読）に由来するものと欧文に由来するものとが，現在混用されている。豊富なことはけっこうであるが，混乱が起こることは望ましいことではない。そこで，符号のいちおうの整理が意義を持つことになるのである。

符号の使い方に関する文献を見ると，記述的なものと規範的なものとがある。どちらも有益であるが，やや細かく調べようとすると問題点が続出する。疑問が起こると言ってもよい。現実と規範との関係も問題であるが，規範を示したものの中には，そういう規範を設定する根拠や理由の述べてないものがある。これは残念なことであった。

一つの符号が，いろいろな機能を果たす場合があり，また，ごく限られた機能だけを果たす場合もある。いわば符号の多義性・一義性と考えてよいと思うが，どちらが望ましい方向であるか，問題が残っている。また，同類の機能を持つもの同士の相互関係や順位などにも，なお考えるべき点があろう。二つの系統の調和ということも，まだじゅうぶんではない。

そして，われわれが実際に使いたいと思うと，それにぴったりした符号が見つからないということもある。新しく符号を考えることも，時には必要であろうが，それにはじゅうぶんな配慮のもとで行ないたいものである。

いろいろな問題があるにもかかわらず，ここでは，ごく限られたことしかできなかった。当局の方針でもあったが，符号の変遷については，ほとんど触れていない。これは，是非とも調査しておきたいことである。使用法や種類についても，現代を中心にし，なお，足りない点を補う意味と，文献の利用価値とを考えて，付録をつけることにした。

以上を要するに，符号の問題は，まだじゅうぶんに解決された

とはいえない段階にあるのである。問題意識を持たなければ，特別な場合の外は，格別の困難を感ずることがないかもしれない。しかし，いちおうの基準ができていることは，国語表記の際に，いろいろな方面で役に立つことと思われる。そして，いっそう能率的な，円滑なコミュニケーションをするためには，多くの人々が符号に関心を持ち，また，理解を深めることも大切なのではなかろうか。